

令和 2 年 6 月 25 日現在

機関番号：17102

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2016～2019

課題番号：16K04142

研究課題名(和文) 発達障害児の家族支援システム構築に向けた「社会的ケア」に関する研究

研究課題名(英文) Social Care Support for Children with Developmental Disorders and their Families

研究代表者

山下 亜紀子(YAMASHITA, Akiko)

九州大学・人間環境学研究院・准教授

研究者番号：40442438

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 2,700,000円

研究成果の概要(和文)：本研究は、発達障害児の家族支援システム構築へ向け、発達障害児の「社会的ケア」を実証的に検討するものであり、発達障害児のケア分担の実態として、3つのレベルに分けて検証を行った。第1にマクロレベルでは、国レベルのケア供給の日英比較を行い、英国においてケアラー支援が充実していることを確認した。第2にメゾレベルにおいて地域のケア供給の実態分析を行い、親の会が多くの役割を果たしていることを明らかにした。また地域社会における専門支援サービスについては、地域差があることを明らかにした。第3にミクロレベルにおいては、母親が排他的にケア役割を担っており、ケア役割が不均等に配分されていることが明らかにした。

研究成果の学術的意義や社会的意義

本研究は発達障害児のケアの社会化実現へ向け、「社会的ケア」の実態を重層的レベルにおいて検討したものであり、以下の3点を明らかにした。第1に日本社会におけるケアラー支援政策やサービスが未整備であること、第2に地域社会において専門サービスが充足しておらず、親の会が重要な役割を果たしていること、第3に個人や家族の単位では、母親が排他的にケア役割を担っていることである。発達障害児の家族支援に関してはケアの社会化の実現が早急に望まれるが、その実態も未解明で望ましいモデルに関する研究もみられなかったため、これらの結果は、今後の家族支援システム構築に資する基礎的資料として、その社会的意義は高いものである。

研究成果の概要(英文)：This study aims to identify social care support for children with developmental disorders and their families. The conclusions derived from this study are as follows: We have done a comparative analysis of policies for carers in UK and Japan, we confirmed that UK offer an extensive support for families. At local community level, parents' groups offer support in a range of ways. There are regional differences in professional services available to families. At the individual level, only mothers have so many roles in caring.

研究分野：社会学

キーワード：社会的ケア 発達障害児 家族支援

様式 C - 19、F - 19 - 1、Z - 19 (共通)

1. 研究開始当初の背景

本研究は、発達障害児の家族支援システム構築へ向けた研究の一部である。日本の福祉レジームは、家族の責任が強調される家族主義福祉レジームである。障害児福祉研究においても、既に家族の存在を所与とする障害児支援システムが構築されていることが指摘されており、家族主義福祉レジームを脱却し、家族を独自の支援対象とする重要性が提唱されている。中でも発達障害児の家族支援は喫緊の課題となっている。発達障害児は小・中学校の通常学級に約 6.3%在籍している可能性が報告され、当事者のみならず家族に対する社会的支援の必要性も認知されつつある。また 2004 年に公布された「発達障害者支援法」第 13 条には都道府県及び市町村による家族支援の努力義務が記され、その法的根拠も得ている。しかしながら、研究代表者が先進的に実施した発達障害児の家族研究では、特に母親にケア責任が集中していること、それに伴うケアの孤立的環境が明らかになっている。

研究開始当初、上記のような状況をふまえると、発達障害児のケアの社会化を進めることは急務の社会的課題であり、実現へ向けた研究も必要であると思われた。ケア研究では、すでに育児や介護の社会化に関する研究の蓄積があるが、障害児研究では、社会化の実態や望ましい社会化のモデルについて検討したものは認められなかった。またケア研究の中でもマクロレベル、ミクロレベルのケア分担の枠組みを示す「社会的ケア」概念は有用であり、発達障害児の領域においても「社会的ケア」の実態を明らかにするための研究の実施が急務の課題であると想定した。

2. 研究の目的

上記の研究背景から、本研究は、発達障害児の家族支援システム構築へ向けた研究の一部として、発達障害児の「社会的ケア」を実証的に検証することを目的として設定した。発達障害児のケア分担の実態としては、次の 3 つのレベルにおいて検討することとした。また日本の比較対象として、家族支援先進国であるイギリスを選定し、日英両国の「社会的ケア」について重層的な分析を行うこととした。

第 1 の「社会的ケア」の段階はマクロレベルであり、国レベルにおけるケア供給について明確にすることとした。具体的には、ケア供給に関わる実態についてであり、ケアラー支援政策を含み、日本とイギリスの国際比較を試みることにした。具体的には発達障害児と家族に対する支援やケア供給について、福祉、医療、教育、労働等々の領域において資料調査、聞き取り調査から明らかにすることとした。

第 2 の「社会的ケア」の段階はメゾレベルであり、ケア供給に関わる地域構造を明確化することとした。地域におけるケア供給の実態について、日英両国の複数地域における調査から明らかにすることを目的とした。具体的にはケア供給主体として、自治体、福祉・医療・教育・労働等の公的機関、NPO、また親の会等任意団体を対象とするヒアリング調査を実施し、地域におけるケア供給構造の全体を明らかにし、地域比較も行うことを課題とした。

第 3 の「社会的ケア」の段階はミクロレベルであり、ケア供給に関する家族の選択構造について検討することとした。家族にとってどのようなケア資源を入手可能であるのか、さらに家族がどのようなケア資源を選択し、組み合わせているのかについて日本の実態を明らかにすることとした。具体的には複数地域で調査を実施し、発達障害児の家族に対する質問紙調査の定量的分析により明らかにすることとした。

3. 研究の方法

2016 年度は、第 1 にミクロレベルにおいて家族の選択構造を検討することとし、前年度に実施した発達障害児の母親の調査の分析を行った。第 2 にイギリスにおけるケア供給実態についての調査を行い、イギリスの地方自治体、福祉機関、チャリティで聞き取り調査を行い、あわせて資料収集を行った。第 3 にケア供給に関わる地域構造を検討するために、地域における保護者向けサービスの実態について奈良県奈良市、宮崎県都城市で調査を実施した。

2017 年度は、第 1 に家族ケアに関する理論的検討を行い、日本における障害児の母親に関する代表的研究において、ケアを行う母親がどのように分析されているかレビューした。第 2 に家族のケア供給実態について、地域における保護者向けサービスの実態について前年度に引き続き宮崎県都城市で調査を実施した。第 3 に社会的ケアとして地域社会で親の会が果たしている役割についても調査、分析を行った。

2018 年度は、第 1 に家族へのケア供給実態について、都城市で継続的に実施している母親のグループインタビュー調査を行った。第 2 に前年度に引き続き地域社会における親の会の役割についての調査を行い、分析を行った。第 3 にイギリスにおける家族へのケア供給実態に関し、イギリスロンドンにおける複数の親の会の代表の調査を実施し、社会的ケアの中で親の会が果たしている役割や、母親のニーズなどに関する聞き取りを行った。第 4 に国内における複数の研究者と発達障害児の母親に対する社会的ケアの状況について研究会を実施した。さらに、イギリスの研究者とも意見交換を実施した。

最終年度の 2019 年度は、第 1 に家族に対するケア供給実態についての調査を継続的に実施し、分析を行った。第 2 に地域における専門機関サービスについて、奈良市、宮崎県で行った専門機関に対する調査、分析を行った。第 3 に発達障害児の母親に対する社会的ケアの状況による影響を検討するため、家族の QOL 調査を行った。

4. 研究成果

(1) 国レベルにおけるケア供給の実態の明確化（マクロレベル）

国レベルのケア供給の実態について、日本の比較対象としてケアラー先進国であるイギリスを選定し、イギリスにおけるケアラー支援制度の概略と民間非営利団体が提供しているケアラー支援サービスの実態について検討した。ケアラー支援制度は、コミュニティ・ケアの一環として位置づけられていた。またケアラー支援に関わる法整備は複数回にわたり行われ、ケアラー支援サービス提供の責務は地方自治体となっていた。また実際に支援サービスを提供しているのは、民間非営利団体であった。サービス内容は、他の国や社会と比べても多岐にわたっていた。民間非営利団体が提供するサービス内容は、全国組織においては政策立案のための運動や調査研究、ケアラーについての啓発などの活動が中心であった。またその他の組織では、直接的なサービスが中心であり多様なサービスの展開がみられ、特に生活を包括的に支援するサービスが提供されていることが明らかになった。日本と比較して、家族に対する支援の歴史は長く、多面的な支援が実施されていた。

(2) ケア供給に関わる地域構造の明確化（メゾレベル）

地域における社会的ケアについて、親の会の役割についての調査を行い、分析を行った。分析の結果、第1に障害児家族メンバーに生起する多様なニーズを救い上げ、かつニーズを充足する支援が行われていること、第2に多様な家族を包括的に支援していること、第3に地域における様々な人材資源が活用され運営されていること、第4に自給自足的に支援活動を実施している問題点がみられることがわかった。

また地域における社会的ケアとして専門機関群についても検討を行った。森岡清志の都市的生活構造論¹⁾に基づき、母親の生活問題解決処理のプロセスとして、専門機関群の実態とその整序化過程について考察した。分析の結果、以下の3点が明らかになった。第1に家族に対する専門サービスについては、一定程度の提供が行われているが、サービス量が不足している問題やサービスの質の問題もみられることがわかった。またサービスの質、量ともに、地域差があることが明らかとなった。第2に障害児の母親がどのように社会財の整序化を行っているのか、という点については、積極的にサービスを利用する母親と、サービス利用に消極的な母親がいることがわかった。第3に地域における専門機関サービスの多寡が母親の社会財の整序化過程に影響していることが示唆される結果となった。

(3) ケア供給に関する家族の選択構造の明確化（ミクロレベル）

発達障害児の母親のケアの選択構造について量的調査分析を行った。宮崎県で行った調査の結果、第1に母親が主なケア役割を担っている比率が非常に高く、ケア役割が不均等に配分されていることが明らかになった。第2にソーシャル・サポートを検討した結果、社会情緒的サポートについては、ほとんどの回答者が得ていることが明らかになった。また、親の会の仲間・同じような障害をもった子どもの親、配偶者、保育園・幼稚園・学校の教職員が有効なサポート源となっていた。第3に子育てについて誰かに責められた経験比率は非常に高いことを明らかにした（表1参照）。責められた相手としては、教員、学校の保護者が上位に入り、学校を中心として子どもが過ごす社会との接点でこうした問題が生じていること、加えて自分の両親、配偶者も上位に入っていることから、身近な関係性においても問題が生じていることを明らかにした。

続いて家族の選択構造について、理論的検討を行った。障害児の母親について、日本における社会学研究のレビューを行い、次の5つの論点に整理した。まず第1に近代家族における母親役割を要請され、排他的にケアや世話役割を行っている点がみられた。第2に、母親たちは、障害の当事者である子どもとともに、差別される存在であることが明らかにされていた。また同時に子どもを自ら差別する主体となることも指摘されている。第3に当事者との相互作用において摩擦が生じ、母親から子どもに対する抑圧性が生じることが論じられていた。第4に同様に当事者との相互作用を通じ、ケアへの強い志向性が生み出される点が見出されていた。第5に障害児福祉実現の主体として制度的にも位置づけられている、いう知見がみられた。以上の知見から障害児の母親の育児支援が充足していない理由が説明できると解釈した。一方で、障害児の母親の実態解明として、生活構造的な視点がみられないことも指摘した。

引用文献

1) 森岡清志, 1984, 「都市的生活構造」『現代社会学』18: 78-102.

表1 子どもの育て方で責められた相手(複数回答)

	実数	比率 (%)
配偶者	9	28.1%
子どものきょうだい	3	9.4%
自分の両親	17	53.1%
配偶者の両親	8	25.0%
親戚	3	9.4%
子どもの学校の保護者	9	28.1%
親の会の仲間・同じような障害を友する人	1	3.1%
友人・知人	7	21.9%
近所の人	4	12.5%
保育園・幼稚園・学校の教職員	10	31.3%
医師・病院	0	0.0%
ソーシャルワーカー・看護師・カウンセラー	2	6.3%
行政機関・公的機関	1	3.1%
療育・訓練	1	3.1%
宗教団体	0	0.0%
その他	2	6.3%

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計13件（うち査読付論文 2件 / うち国際共著 0件 / うちオープンアクセス 1件）

1. 著者名 山下亜紀子	4. 巻 9
2. 論文標題 イギリスにおけるケアラー支援制度と民間非営利団体によるサービスの実態	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 人間科学 共生社会学	6. 最初と最後の頁 95-104
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 Okumura Yasuyuki, Usami Masahide, Okada Takashi, Saito Takuya, Negoro Hideki, Tsujii Noa, Fujita Junichi, Iida Junzo	4. 巻 28
2. 論文標題 Glucose and Prolactin Monitoring in Children and Adolescents Initiating Antipsychotic Therapy	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 Journal of Child and Adolescent Psychopharmacology	6. 最初と最後の頁 454 ~ 462
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) 10.1089/cap.2018.0013	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 根来秀樹・式部陽子	4. 巻 73
2. 論文標題 注意欠如・多動症 (ADHD) 治療・支援 (特集 自閉スペクトラム症と注意欠如・多動症の臨床と病態理解)	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 最新医学	6. 最初と最後の頁 1368-1373
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 根来秀樹	4. 巻 200
2. 論文標題 強迫症状・強迫症	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 こころの科学	6. 最初と最後の頁 65-70
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 山下亜紀子	4. 巻 8
2. 論文標題 障害児の母親はどのように捉えられてきたのか 社会学研究のレビュー	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 人間科学 共生社会学	6. 最初と最後の頁 31-39
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 根来秀樹	4. 巻 46巻 10号
2. 論文標題 メチルフェニデートによる成人ADHDの治療 (特集 成人の注意欠如・多動性障害(ADHD)の診断と治療)	5. 発行年 2017年
3. 雑誌名 臨床精神医学	6. 最初と最後の頁 1249-1254
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 根来秀樹	4. 巻 65巻 10号
2. 論文標題 ADHDに対する薬物療法の現状と課題 : インチュニブ錠発売をうけて (特集 発達障害に対する薬の効用と限界)	5. 発行年 2017年
3. 雑誌名 教育と医学	6. 最初と最後の頁 914-922
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 根来秀樹	4. 巻 71巻 15号
2. 論文標題 おねしょ・おもらし(夜尿・遺尿・遺糞)など : 排泄の問題 (子どもの困ったクセ) -- (子どものクセの理解と対応)	5. 発行年 2017年
3. 雑誌名 児童心理	6. 最初と最後の頁 85-93
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 江尻真樹、根来秀樹	4. 巻 31巻 2号
2. 論文標題 児童精神科の薬物治療について、押さえるべきポイントは何か? (特集 未成年者の精神科診療 : そのコツを知る)	5. 発行年 2017年
3. 雑誌名 精神科	6. 最初と最後の頁 111-115
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 山下亜紀子	4. 巻 7
2. 論文標題 発達障害児の母親の生活実態に関する研究 自記式調査をもとに	5. 発行年 2016年
3. 雑誌名 人間科学 共生社会学	6. 最初と最後の頁 37-46
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 根来秀樹	4. 巻 28
2. 論文標題 ADHDと気分障害	5. 発行年 2016年
3. 雑誌名 精神科	6. 最初と最後の頁 269-273
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 浦谷光裕、岩坂英巳、太田豊作、中西葉子、山室和彦、岸本直子、本庄あらた、高橋弘幸、根来秀樹、飯田順三、岸本年史	4. 巻 57
2. 論文標題 ソーシャルスキルトレーニング前後の注意欠如・多動症の事象関連電位	5. 発行年 2016年
3. 雑誌名 児童青年精神医学とその近接領域	6. 最初と最後の頁 438-449
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 根来秀樹	4. 巻 65
2. 論文標題 ADHDと気分障害	5. 発行年 2017年
3. 雑誌名 教育と医学	6. 最初と最後の頁 44-52
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

〔学会発表〕 計12件 (うち招待講演 2件 / うち国際学会 0件)

1. 発表者名 山下亜紀子
2. 発表標題 地域における障害児親の会の活動実践が意味するもの
3. 学会等名 日本社会分析学会第135回例会
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 小枝久美子・大西貴子・式部陽子・根来秀樹
2. 発表標題 発達障害児の学習支援プログラム「夏休み!!お助けプロジェクト」の開発と実践ー教員養成系大学の学生と現職教員への研修効果
3. 学会等名 第59回日本児童青年精神医学会総会
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 大西貴子・根来秀樹・小枝久美子
2. 発表標題 自閉スペクトラム症児の問題行動改善において応用行動分析を学んだ大学生の介入が効果的であった一例ー学生と専門家が臨床現場で協働するシステムの活用に向けてー
3. 学会等名 第59回日本児童青年精神医学会総会
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 山下亜紀子
2. 発表標題 地域における障害児親の会が有する機能について 宮崎県の障害児・障害児家族の団体Aを事例として
3. 学会等名 日本社会学会
4. 発表年 2017年

1. 発表者名 根来秀樹
2. 発表標題 シンポジウム1「ADHDの診断と治療評価に、画像・尺度評価をどのように活用するのか？」NIRSによるADHDの評価
3. 学会等名 第59回日本小児神経学会学術集会（招待講演）
4. 発表年 2017年

1. 発表者名 根来秀樹
2. 発表標題 薬事委員会セミナー「子どもの精神病性障害についての薬物療法について」発達障害に併存する精神病症状
3. 学会等名 第58回日本児童青年精神医学会総会
4. 発表年 2017年

1. 発表者名 大西貴子、式部陽子、小枝久美子、根来秀樹
2. 発表標題 発達障害児の学習支援プログラム「夏休み!!お助けプロジェクト」の開発と実践（1） 応用行動分析を用いた環境設定と強化システムについて
3. 学会等名 第58回日本児童青年精神医学会総会
4. 発表年 2017年

1. 発表者名 小枝久美子、大西貴子、式部陽子、根来秀樹
2. 発表標題 発達障害児の学習支援プログラム「夏休み!!お助けプロジェクト」の開発と実践(2) 学習意欲を引き出すアプローチ
3. 学会等名 第58回日本児童青年精神医学会総会
4. 発表年 2017年

1. 発表者名 式部陽子、小枝久美子、大西貴子、根来秀樹
2. 発表標題 発達障害児の学習支援プログラム「夏休み!!お助けプロジェクト」の開発と実践(3) 学習に困難のある子どもへのペアレント・トレーニング
3. 学会等名 第58回日本児童青年精神医学会総会
4. 発表年 2017年

1. 発表者名 根来秀樹
2. 発表標題 薬物療法に関する検討委員会セミナー「児童青年期精神科における薬物療法神経発達症を中心にー」注意欠如・多動症(ADHD)と併存症
3. 学会等名 第57回日本児童青年精神医学会総会(招待講演)
4. 発表年 2016年

1. 発表者名 大西貴子、田中宏季、小枝久美子、式部陽子、根来秀樹
2. 発表標題 文字間隔と字体の操作が発達性ディスレキシア児の読字に及ぼす影響
3. 学会等名 第57回日本児童青年精神医学会総会
4. 発表年 2016年

1. 発表者名 山下亜紀子,
2. 発表標題 発達障害児の母親の社会財としての専門機関群の実態
3. 学会等名 第92回日本社会学会大会, 2019.10.
4. 発表年 2019年

〔図書〕 計2件

1. 著者名 日本家政学会家族関係学部会編、久保桂子、佐藤宏子、山下亜紀子 他	4. 発行年 2018年
2. 出版社 丸善出版	5. 総ページ数 224
3. 書名 現代家族を読み解く 1 2 章	

1. 著者名 根来秀樹他33名(共著)	4. 発行年 2016年
2. 出版社 じほう	5. 総ページ数 426
3. 書名 注意欠如・多動症 - ADHD - の診断と治療のガイドライン(第2章3.1「ADHDの脳画像研究の臨床的意義と限界」、第2章5.1「自閉スペクトラム症(ASD)との鑑別」、第4章2「成人期のADHD」を分担執筆)	

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究分担者	根来 秀樹 (NEGORO Hideki) (80336867)	奈良教育大学・教職開発講座・教授 (14601)	